

Ⅱ. 生徒の読書傾向からみた若干の問題

織 田 長 繁

Ⅰ. はじめに

かつて非社会的行動をとった本校生徒を指導していた時、その読書が文学以外の1部に集中していることを学校図書館に保存してある「個人カード」から発見したことがあった。この1例を以て全体に及ぼすのは早計であると思うが、生徒の読書傾向をある程度押えておくことは思考の方向、内容更に性格の1側面をも知ることになるし、これらを必要な場合に利用するならば指導の一助になるのではなかろうかと考えてみた。云わば本校生徒の読書大勢を探り、それから著るしく異なった読書傾向を示すものがあれば、その者が指導を必要とする状態にあるか否かを検討し、必要が認められるならば指導を加え、その結果どのような反応を示すかを得ようとするのが本来の目的である。この意味から今年度においては、本校生徒の読書がどのような特色を持つのかを調査することにした。

しかしこの調査には限界がある。読書だけがその者の考え方を規定するものではなく、マスコミの影響が極めて大きいことは自明の理であるからである。第2にこの調査を、学校図書館の書物に限定したことである。「個人カード」は明確に書名が記録されるので確実な資料になるが、その反面本人の蔵書、家庭の蔵書、先輩友人等から借用したものは含まれていないし、また館内で読んだ場合には「個人カード」に記録されてはいない。このことはこの調査の意味を大きく減少させるものであろう。しかし一応の手掛りになるものを求めるならば、不確実な記憶に頼るよりも本人の手によって記録された「個人カード」に基づく方が妥当ではなかろうかと考えた。第3には、整理上48年度第1学期と夏休み前半までに限定したことである。

(本校では休み以外の場合には1人1回3冊までを7日間、夏(冬・春)の休み中は1人5冊までをそれぞれの始業式の時まで、館外貸出しを認めている。)

以上のような限界の上に立つ調査であるが、一応の目安やすになり得るであろうし、以下述べるような立場からの調査は本校では行なわれた形跡がない(月別・学年別・部門別・男女別の統計はある)ので、ここに記そうと思う。また相当量に及ぶ数量的な資料一例えば中学校高校別の学年・評価・部別の人員表(男女別)やこれに冊数別を加えた一覧表等も用意したけれども、生の数量を逐一掲げることは省略した。

Ⅱ. 中学校の場合

不確実な記載と思われる若干名を除き、中学生全員の中で1冊以上の書名が「個人カード」に記されたものは140名(55.5%)、1冊の記載もないもの112名(45.5%)、140名は2年生が60名、1年生42名、3年38名で、2年生にあっては全員の70%、1年3年では48%ずつが読んでいる。読んだ者の1人当たり平均冊数は3.7冊で男女の差はほとんどないが、最も多く読んだ者は15冊(月当り3冊)が1人、13冊が3人あり何れも女子である。

読んだ者を学年・評価・部の立場から区分してみたが、この場合の評価とは第1学期末における全教科の評価を合計して得た数値を偏差値に再計算し、これを基礎にして全校的規模によって5段階に区分したものである。「部」は学期初めに任意に登録した部(部に属さない者もある)を、体育系・文化系・何れにも属さないもの即ち無部の3者に大別した。従って学年・評価・部別それぞれの立場に立った時の分析と、3者の内の任意の2者の相関、3者の総合的な関係を見ることができし、またそれぞれの男女別の区分もある。これらの諸点を1つずつ述べるのは余りにも繁雑であるので、かなり顕著な傾向を示している場合を中心にまとめてみた。

第1には、2年生が1部の評価段階の者を除いてよく読書し、1年3年の順でこれにつき、しかも全学年を通じて評価4(以下④のように略記する)より②に属する者がよく読むことが明白である。読書に関するアンケートをとっていないので、この傾向が如何なる背景から出てきたのかは不明である。しかし調査した時期と進学に関しての本校の特殊事情から考えて、3年生が「受験」に非常に大きく左右されているとは考えられないので、本年度の3年生は読書の少ない学年であるのかとも思われる。2年生が読書に親しむ度合いが大きいのは、後述する高等学校の場合と同様で、学校の中心的な存在を示す資料の1つではなかろうか。②の者が④よりもよく読書することと並んで、⑤が③とほぼ同じような読書率を示していること、また1年生を除いては①が⑤よりも読書率が上廻っていることは注意すべき点である。1回の調査である上に短期間と云う条件、また書物の内容や難易性に触れていない弱点はもっているが、評価と読書は必ずしも一致

してはいないようである。

第2に「部」別の読書については、文化系の者は67%が読んでいることはうなずける傾向ではあるが、考えようによって体力の消耗が少ない割には読書する者が少数である感じを受ける。そしてⅠを除いては各評価毎に体育・無部の者よりも読む者は多く、Ⅲの数はその77%の者が読んでいる。体育系の者は約半数(54%)が読んでいるが、意外なことには何れの部にも属さない云わば自由に使える時間を最も多く持っている無部の者が体育系と同じ率を示していることがある。しかし1人当たり冊数では体育系3.5冊に対して無部は4.0冊で0.5冊の差があるが、文化系の4.4冊には及ばない。無部の生徒特に1年2年の場合には読む者が極端に少なくなっているため、その生活がどのようなものであるか、例えば浪費する時間が他に比べて多いようにも思われるし、また読書だけが余暇活用の方法ではないにしても、広い意味での指導を必要とするのではないだろうか。

学年・評価・部の3者を総合した場合に云えることは、2年生文化系のⅢと2年生体育系のⅠがそれぞれ86%と80%の読書率を示し、読む者の少ないのは1年生体育系のⅠ(25%)と1年生無部のⅡ(33%)である。この外100%または0%の数も算出されたが、この場合は実数1または0であったので略してある。何れにしても2年1年にあっては読書をどのように位置付けていくか、実際の指導をどうするかに問題があると思う。

以上の調査とは全く無関係に2年生担任によって、夏休み中の読書調査が行なわれた。提出された記録には不明確な書名のものも相当数含まれてはいるが、全員が読書していてその平均冊数は1人4.7冊、3冊読んだものが27%で最も多く、4冊(15%)2冊(13%)がこれに次いでいる。個人的には17冊が最も多く、16冊14冊各1名がこれに続いている。部別の立場からでは文化系と体育系が4.8冊を示すが、無部は4.4冊である。彼等が読んだと記した書物が学校図書館のものであるか否かの記載はないが、約半数程度は図書館以外のものである。しかし全集に含められているものや出版社が異なるだけで内容が同様なものは%に及んでいないので、図書館運営活動の問題として検討したい所である。

Ⅲ. 高等学校の場合

3年生の受験準備は相当量に及ぶことは明らかで、このために読書の減少も十分に考えられるところではあるが、調査時期の関係上1年と同様に扱ってみた。全員を通じて学校図書館の書物を読んでいるものは53%に及んでいる。読んだ者47%(183名)の内

では2年生40%1年33%3年27%で、ここでも中学校と同様に2年生が活動の中心となっていることを示している。冊数の点からは、全校生徒平均1.9冊、読んだ者だけでは3.2冊(男女差は0.3冊で女子が多い)、最高は3年女子の18冊、1年女子15冊、3年女子13冊各1名である。夏休みを含んでいる調査期間において、読書をするであろうと思われる高校生が読んでいることは、意外の感がある。学校図書館の蔵書が彼等の意に添わぬものが多いのか、読んだ書名から少数精読の傾向とも云えぬものがあるために、読みかつ考えることをしなくなった社会風潮がここにも表われているのか、他に理由があるのかは不明である。社会的風潮だから仕方がないとする受止め方は消極的にすぎるし、読書量減少の理由を探索しなければならないであろう。

読んだ者について学年・評価・部(評価と部の区分は中学校の場合と同一方法によった)によってみた傾向のうち、著るしいものは次の通りである。

第1には、2年生のⅡを除いて各学年とも評価のよい者程読書をしていることが目立つ。中学校とは異なっている傾向が見出されるが、これは学習内容の高度化につれて、評価の低い者は学習についていくことに力を注ぎ、余力が乏しくなっていくことが考えられる。この考えからすれば2年生Ⅱの者が多く読む理由が分らなくなるが、学習に関して満たされないものを読書に求めているのかもしれない。9冊10冊を読む者が他に比べて多いし、5冊6冊の者も相当数あることはこれを暗示しているかもしれない。

第2に部と学年の関係をみると、体育・文化・無部の何れをとっていても2年生が圧倒的に読んでいるし、学年を通じた場合には文化系がよく読んでいる。文化系の部は15あって活動内容も千差万別ではあるが、部活動に関係していると思われる書物も読まれているので、単なる技術的なものを超えようとする意欲と、それから出発した一般的な読書への展開と云うことも考えられる。無部の者(1年生に無部の者は0名である)の読書率は体育系を下廻っているが、1人当たり冊数では3.7冊となって文化系に続いているので、よく読む者とほとんど読まない者の両者が歴然としていると云えよう。無部の内4冊以下の読書をしているものはその85%に及ぶことは、余暇活用の面から一般的な指導は勿論のこと読書についても積極的な指導が必要と思う。

第3に学年・評価・部の3者の関係からみると、2年生文化系のⅣに属する者は全員が最低3冊以上で、これに次いで3年生体育系および1年生文化系のそれぞれⅣの者と3年生文化系および2年生文化系のそれぞれⅡの表が各75%の率を見せている。逆に全く読

んでいないものは3年生文化系無部の①である。全体的立場からと3者の関係からとの傾向にやや相違点が出ているが、その検討は省略する。

第4に、読書の内容から見て思想・哲学・宗教関係の問題がある。全体から見れば多く読まれてはいないけれども、この部門での読書は2年生が3年1年の3倍に及ぶ率を示していることがある。これは2年生に倫理社会の授業があり、1学期においてはグループ討論を実施していたことに関係があると思われる。しかも④②③の3段階に集中していることは興味深いものを感じさせる。④の者はこの面での理解も十分できる力がある為であろうし、②が僅かの差でこれに続いているのは、理解への努力を重ねなければならないことを示しているのではなかろうか。また部別の立場からみると、無部で読んだ者の実数は体育系文化系の2倍に及び、しかも全員が読んでいることが目立っている。適切な助言を得たならば、この方面への読書は

この時期にあって望ましいものと思う。適切な助言がない場合には、1面的な見方しかできなくなる恐れも出て来るであろう。この点に関し1年生も少数ではあるが読書をしているものもあるが、内容的には2年生よりも身近な問題を取扱う書物が多く、高校生になった自覚・自我への目覚めのような要素が働いている為であろう。1年生にあってこの傾向を示しているのは⑤④に限られていることも、注意すべきではなかろうか。

IV. おわりに

以上、中学と高校に区分して読書傾向の概要をまとめた。具体的な数字を一覧表的にあげなかったために、かえって整理・理解が雑然としてしまったことを否定しない。またこの調査を出発点として長期的な調査を重ねて、その中から何等かの指針が得られれば幸甚である。